

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 三吉美加

本論文は、アメリカ合衆国ニューヨーク市のドミニカ系移民、とりわけ移民2世の若者のアイデンティティ構築に関する文化人類学的な考察である。その大きな特徴は、若者がダンスという身体実践(身ぶり、しぐさなどの身体動作をも含む)を通して自己を認識し、文化を捉え直し、アイデンティティを構築していく過程を描き出している点である。このテーマを設定した理由を著者は「踊らなければドミニカ系ではない」と調査中に幾度も聞かされたからだと述べている。データは主としてフィールドワークによって得られたものであり、現地調査は1998年5月から2000年12月までの間に計18か月にわたって行われている。

本論文は7章から構成されている。第1章「序論」では、「身体をめぐるアイデンティティの構築」というテーマが提示され、先行研究が検討される。続いて、著者の現地調査のプロセスが示され、最後に本論の構成が述べられる。第2章「ドミニカ系集団の現在と歴史」では、1960年代以降ドミニカ共和国からニューヨークへ大勢の移民が流入し、本論文の舞台であるニューヨーク市ワシントンハイツ地区においてコミュニティを形成するに至った経緯、ドミニカ共和国の歴史的背景、コミュニティの社会的・経済的状况、人種対立と暴動、コミュニティ活動、そこにおけるNPOやアーティストの役割、ニューヨーク生まれの移民2世の若者などについて概観される。第3章「アイデンティティとダンス 人種・エスニシティ・文化」では、アイデンティティの問題を考える上での基本的な枠組みとして、人種とエスニシティの問題が検討され、文化に関しては、ドミニカの文化を構成する諸要素のうちスペイン的要素、先住民的要素、アフリカ的要素のどれを強調するかで文化の捉え方が異なること、スペイン的要素を強調するもの、諸要素の混在とするもの、アフリカ的要素を強調するものの3つの文化把握の類型が存在することが指摘される。ダンスに関しては、ドミニカの「国民的文化」とされ、スペイン的要素を継承するとされるメレンゲが取り上げられた後、アフリカ的要素の強い音楽やダンスを評価する動きについても触れられている。第4章「バイラドーレス」では、2世の若者の非行防止を趣旨として始められたアフタースクール・プログラムでのダンスクラス、バイラドーレスについて記述される。若者の参加の動機や関わり方、ダンスグループの特徴、アーティストの影響、そしてバイレ(ドミニカ系ダンスの総称)を学習することで

新たな視点から自らの身体と文化を意識化していく様子などが詳細に検討されている。第5章「ヒップホップ」では、商業音楽・ダンスとしてのヒップホップやコミュニティや地域性を重要視したローカル・ヒップポップとの関わりやドミニカ系のアーティストの影響をも受けながら、若者たちが「黒人性」を自覚していく過程が考察され、ヒップポップが彼/女らの自意識の形成に大きな役割を果たしていることが指摘される。第6章「動作の型の解釈」では、若者の身振りからダンスまでの身体動作が「ドミニカ的型」と「アフリカ的型」に分けられ、言説のレベルと実際の身体動作のレベルの双方から検討される。またバイレからヒップホップへの身体動作のモード転換についてダンスクラスでの観察例が分析されている。このような分析から、身体のバイカルチュラリズムという視点が示されるが、「白」か「黒」に二極化されるアメリカ合衆国の人種環境においては「黒人性」＝「アフリカ的型」が強調されることになることと論じている。第7章「結論」では、本論の議論を要約し、ニューヨークの多文化主義的な文化環境の中で、ドミニカ系2世の若者のアイデンティティはきわめて多重に構成されているが、ダンス実践を通して彼/女らのアイデンティティをめぐる想像力は、一方において「アフリカ的なもの」「黒人性」へと向かい、他方において自らが住むワシントンハイツを中心としたローカルな場所、「地元」へと向かう。こうした若者のアイデンティティのあり方をより深いレベルで「人間」へと向かうアーティストの場合と比較しながら論が閉じられている。

全体として、本論文の意義は、ニューヨークのドミニカ系移民のアイデンティティ構築がダンス・身体実践と深く関わっていることを、国際移住、若者、人種、エスニシティ、歴史、コミュニティ、都市の大衆文化などの問題と接合しながら、長期にわたるフィールドワークと細やかな参与観察に基づいた濃密で豊かな民族誌的データによって示したことにある。移民とアイデンティティ構築に関する文化人類学的研究への貢献として以下の3点が重要である。

第1に、ニューヨーク生まれのドミニカ系2世の若者に着目することによって、1世の親の世代とは異なる方向性をもった文化認識やアイデンティティ構築のあり方をきわめて動態的に描き出していることである。世界都市ニューヨークという背景の中で、彼/女らは複数のポジションをもっており、彼/彼女らのアイデンティティは重層的に構成されている。そうした中で、アフタースクールでのバイレの習得はドミニカ・エスニシティを意識させるものではあるが、彼/女らのヒップホップとのかかわりや「白」か「黒」に二極化されるアメリカ合衆国の人種環境においては、彼/女らの身体は「黒人」として「人種化」されて

いく。このアイデンティティの構築をめぐるエスニシティと人種の動態的な関係を明らかにした点は重要な貢献である。

第2に、アイデンティティ構築を検討するにあたって、言説のレベルだけでなく、ダンスを中心とする身体実践の果たす役割に注目している点である。当該民族集団の身体動作やダンスはしばしば無意識のうちに習得されるが、アフタースクール・プログラムで学習する過程で、ダンス実践は2世の若者にとって文化を意識化する重要な方法となる。この点は、文化を研究する上で、無意識的なレベルと意識的なレベルをつなごうとする重要な試みであると評価できる。そうした中で、身体のバイカルチュラルズムや「人種化」に関する著者の観察と分析は、今後、身体と文化をつなぐ研究に新たな展望を切り開くものである。

第3に、本論文で論じたことを今日のアメリカ合衆国の多文化主義の文脈においてみると、多文化主義が無視し、隠蔽している身体性の問題に突き当たるとい著者の主張は、米国の多文化主義研究に基本的で、重要な問いを投げかける。この点では、公式的な多文化主義政策の一環として開設されたアフタースクール・プログラムは、本来の趣旨とは別の展開を見せる。若者たちが親の世代が望むようなドミニカ・エスニシティの文化表象よりも彼/ 女らを取り巻いている人種という可視的な身体性(黒人性、アフリカ的なもの)に敏感に反応するという状況である。このアメリカ合衆国の多文化主義の皮肉な状況を参与観察の現場から明らかにしたことは、本論文の大きな貢献である。

審査委員会においては、本論文の論述の中にはいくつかの事実関係の誤謬が認められること、編集上の不備や不適切・不用意な表現がみられること、さらに論証や分析の仕方などには不十分な点、改善すべき余地があることなどが、指摘された。しかしこれらは、本論文全体の価値を損なうほどの瑕疵ではないことが審査員全員によって確認された。したがって、本委員会は本論文が博士(学術)を授与するにふさわしいものと認める。